

「うん……よかった……」

双つのラビアにぶらさがるクリップは、はじめは痛かったものの、今は痺れて感覚がない。

だが、たまらないのは、歩く動作でクリップが揺れてぶつかるたび、ちりんとかわいい音が鳴り、振動が子宮に到達することだった。

痺れきった子宮は、ファミレスのときのように疼かないが、コップ一杯に入れた水が、表面張力で持ちこたえているようなもので、いつまた発情しはじめるかわからなかった。

垂れさがったラビアに刺激を与えたくないと思うせいで、がにまたになってしまふのが恥ずかしくてならない。

乳房の根を絞るリボンが与える乳房の甘い痛さも、耐え難い^{がた}ほどになっていた。汗を吸ったリボンが縮み、乳房をよりいっそう締めつけはじめたのである。

「くっ」

「だいじょうぶか？」

足をふらつかせてしまったところ、横を歩く義兄が、亜梨栖の肩を抱いてきた。

二人だけの時間を重ねるうち、二人はどこか似た雰囲気を漂わせるようになってきた。親密そうな雰囲気は、恋人同士のそれというより、兄妹のそれだ。



俊也の様子は、気分を悪くした妹を氣遣う、やさしいお兄ちゃんの図だ。

「お兄ちゃん……」

——好きよ。お兄ちゃん。大好き。

抱きつきたくてたまらないが、親指がひどく痛んだので自重する。

亜梨栖は縛られていた。

両手を背中にまわし、親指の外側をつけた状態で、リボンをぐるぐる巻きにされていたのである。

指を立てて、手に小さめの紙袋を挟んでいる。拘束された親指は袋に隠されて、後ろ手にもものを持っているようにしか見えない。

「んっ、だいじょうぶだよ。お兄ちゃん」

「ムリするな。苦しそうだぞ。エレベーターでクリップを取ってやる」

俊也が耳打ちした。

「そうだね。私……もう、限界……」

ワンピースの胸には、興奮して勃起した乳首がはっきり見えるし、秘部はとめどなく蜜を垂らし、アスファルト道路にミルク臭のする水滴を落としていく。甘ったるい体臭も強くなり、氣づかれそうでドキドキする。

マンションに入り、エントランスを突きついて、ちょうど来たエレベーターに乗る。

ドアが閉まると密室になった。

恐怖と緊張がひと息にほどけ、その場にへたりこみそうになった。

「おっと」

すかさず俊也が支えてくれる。

リボンとクリップは亜梨栖の体力と氣力を奪っていて、マラソンのあのようなにはあはあしている。

「よ、よかった……誰もいないね」

「ちょっと待ってろ」

俊也が亜梨栖の足もとにしゃがみ、スカートをめくりあげ、クリップをはずした。ひとつ目がはずれてほっとしたとき、とまる階を示す電光表示が二階で点滅した。

「お兄ちゃんっ。ドア！」

息がとまりそうになった。

——どうしようっ！ 見られちゃうっ!!

エレベーターが開き、ドアが開いた。

俊也は、落としものを拾った、という雰囲気^{いんぴ}で立ちあがった。

乗ってきたのは大学生ぐらいの青年だ。

エレベーター内に立ちこめている淫靡^{いんぴ}な雰囲気^{いんぴ}に気づいたのか、亜梨栖のまとう濃

密な発情臭が原因なのか、亜梨栖の胸もとや膝小僧のあたりをじろじろ見て、にやにやと笑っている。

亜梨栖は平然とした顔をつくろって、つんと顎をあげた。
横に立つ俊也が、亜梨栖のお尻を後ろ手にいじってきた。

——なんてコトするのよっ!? お兄ちゃんっ!!

手が自由なら、俊也の手首を叩いてやるところだ。

亜梨栖は、表情を硬化させ、ぷいっと顔をそむけた。背中をピンと緊張させ、なにもされていませんよ、私は普通ですよ、と全身で訴える。

女の子の気持ちからすると、エッチなことを強制されているという事実よりも、見ず知らずの第三者に自分のエッチさを知られるほうがつらい。

だが、俊也が、後ろ手にスカートをめくりあげて剥きだしのお尻を揉みだすと、もうダメだった。

ひとつだけ残っているクリップが揺れてラビアを揺さぶり、痺れきった子宮がまたもキュンキュンと疼きだす。

「はうっ……はあ……」

——だめっ。がんばるのよっ。エッチな声を出しちゃだめっ。お兄ちゃんに気づかれちゃうっ!!

だが、子宮の疼きは乳房の内側の疼きへと発展し、今までの何倍という強さで身体
の芯を揺さぶってきた。

——ああ、どうしようつ。イキそう……。お兄ちゃん。やめて……。私、イッちゃう
よお……。

もうだめだ。エレベーターのなかで、知らない人に見られながら絶頂を迎える。失
神するにちがいない。お漏らしだつてしてしまうかもしれない。

エレベーターの上昇速度は、いやになるほど遅い。

心臓がドッドッドと速い鼓動を刻んでいる。

俊也の手がお尻の丸みを伝いおり、指先が尻穴へとめりこんだ。

「えっ!? や、やだつ、きやあつ!」

予想外のところへ受けた刺激に、思わず悲鳴が出てしまう。

三階のランプが点滅した。

すぐにドアが開き、青年が名残惜しなごりそうに振りかえりながらエレベーターを出てい
った。